

農林省園芸試験場・

そ菜部・育種第1研究室の紹介

西 貞 夫

“植調”誌のこの題目に登場する各研究室が、おのおの、わが国における除草剤や生育調節剤の発達の中で果たした歴史的な役割りや、はなばなしい業績でその紹介を飾るであろうのに対して、当研究室がその名称と現在までの活動とのうらはらな因果関係の説明で、この記事を始めねばならないということは、いうなれば、“ほいなけれ”というところである。そのいきさつの一切については、さきごろ発行された“除草剤二十年のあゆみ”に述べたが、育種研究室が除草剤や生長調節剤の試験を行なっているということが、そ菜における除草剤研究の発展経過やその現状、限界などを端的に物語っているといえないこともない。

この研究室は、昭和26(1951)年、当時の農技研・園芸部・そ菜育種第1研究室として発足した。それまで園芸部には、研究室制度が確立されていなかったのであるが、育種2研究室、栽培生理と採種各1研究室内の計4研究室を設けることになって、筆者がその室長に着任したのである。研究室の設立された理由は、当時才2次世界大戦によって荒廃の極にあったそ菜品種の状態を旧に復し、さらに主として“かん”に頼って行なわれてきたそ菜育種をイネのような体系的なものに少しでも近づくために、“そ菜育種の基礎的研究”を行なうということ

であった。したがって、主たる目的は育種方法の理論的基礎を明らかにすることや育種体系の整備ということにあったが、育種方法としての生長調節剤の利用なども当然含まれると理解されたことが、現在のように除草剤・生長調節剤関係の試験を実施する一つの根拠にもなっている。

発足当時は、研究員室長以下3名、ほ場員1名の計4名で、現在園試興津支場のそ菜第1研究室長の任にある栗山尚志技官は、新卒採用の研究員として筆者と同時に着任し、以来昭和38年室長として転出するまで筆者を助けて研究に従事し、初期のそ菜除草剤研究の実質的な推進役を果たしたのである。新任および新採用の室長と室員が着任したものの、すでに4月をすぎた当時研究室の長期計画主要研究課題として予定していた“アブラナ類の種属間交雑”を行なうにはおそすぎた。したがって、果菜類を用いた予備的実験を小規模に行なってはいたものの、研究員全員が当面の実験もなく、文献調査に明けくれるという状態に置かれた。そこで、当時、耐病性育種の研究室長と農林省の研究企画官(PL)を兼務しておられた清水 茂さんが、“それほどヒマ(?)ならば”ということで、当時ようやく水田での利用が本格化し、その副産物として水田作農家の裏作や隣接する畑での

そ菜に薬害を生じて、物議をかもしだしつつあった2,4-Dの実験を筆者らにすすめられたのである。当時、生意気盛りで（今も？）、新境地の園芸部の連中に目にも見せてなどと思っていた筆者らは、これがそれ以後現在に至る長い除草剤との付き合いの発端になるとは露思わず、大いに張り切った。トマトだけでも936株、そのほかナスやイチゴを含む多数の材料を使い、ほ場の土壌分析やはち植えによる各種のモデル実験までも行なって、当時の江口庸雄科長が“始めて近代的なデザインによる試験をみた”と仰言ったとか（真偽のほど不明）という試験であった。結果は、現在の知識からすれば予見できるように失敗で、徒に害徴の記載やその写真の収集に終わったけれども、この経験がわが研究室に、除草剤を含めて試験研究はどのような手順を踏むものかを教え、緑の薄かった除草剤や雑草の名称をきわめてインティメートなものとするなどのメリットもあった。

翌年からは本業のほうも順調に進むようになったので、除草剤が本務ではなくなったが、2,4-Dのそ菜に及ぼす薬害（噴霧器などの共用による）の反動で除草剤の試験そのものも全般にしばらく停滞した。しかし、昭和29年からCIPCの連絡試験に始まる振興局の研究推進には再び参加して、昭和35年ごろまでつづいた才1期の除草剤探索試験段階終了まで、常に試験の企画・運営・取りまとめ等中心的役割を担ったことは、前述の20年史に詳述したとおりであって、この間当研究室は多くの試験を担当したのみでなく、メーカー側よりする試験委託に対してその可否を検討し、受託試験場の選定・交渉等、現在植調協会が果たしている役

割りも担当したわけである。昭和38年秋に栗山技官が転出してからは、戸田幹彦技官がその後をつぎ、試験実施面を担当して現在に至っているが、翌39年秋の植調協会発足によって、事務的な場面はあげてこれに受けつがれることになった。

現在、当研究室の果たしている役割は、大きくわけて3つある。その才1は、植調協会を経由する試験の受託試験場選定である。この面は近い将来植調協会に肩がわりされるものと期待しているが、現状では受託者側の人的構成との関係もあって、この割つけが意外に面倒でもある。才2は、いわゆる基礎的試験の担当である。基礎といってもその内容は各種の代表的そ菜をは種して、は種後および生育期土壌処理による薬害と除草効果を検討するという程度のことで、いわばそ菜側のスペクトラムをスクリーニングするということに主力が置かれている。本業にあらざる所以である。才3は、一般の除草剤ほかの実用性試験の分担であって、これは他の都道府県試験場が担当する試験と同様である。

国立機関の中に、除草剤を含めたそ菜向け生長調節剤の専門研究室が必要かどうかという点には、人による意見の相違もあるが、当研究室では本業の一部である“組織培養”の研究の中で、多数の生長調節物質を取り扱っており、すでに実施面ではこの論議を止揚した立場にあるといっても過言ではない。

（筆者は、育種才1研究室長）